

楽しい仏教用語

その31

【沙羅双樹（さらそうじゆ）】

『増鏡』に「さらざの木の五日は鶴の林にたき木尽きにし日なれば」とあります。

さらざは二月、中の五日は十五日、鶴の林は沙羅双樹のことで、たき木尽きには『法華経』の「仏此の夜滅度したもうこと、薪尽きて火の滅ゆるが如し」からきたものです。

つまり、二月十五日はお釈迦さまが沙羅の樹林で涅槃に入られた日であるというのです。沙羅はヒマラヤ山麓からインド全域にみられる半落葉性の高木で、白い花を咲かせます。

お釈迦さまの入滅のとき、この木は季節はずれの花を咲かせ、花びらをお釈迦さまの遺体にふりそそいだといひ、さらに、悲しみのあまりあたかも白い鶴のように色が変わり首を垂れたと『大般涅槃経』はいいます。

これから沙羅双樹を鶴の林といいました。



善教寺「石」シリーズ その13 『駐車場の手洗い石』

【懺悔（ざんげ）】

「ザンゲ」は、今ではキリスト教の雰囲気を感じる語です。しかし、本来は「サンゲ」と読み、仏教語なのです。

インドの語「クシヤマ」を音写すると「懺摩」。意識すると「悔む」となります。そこで、これを合成して「懺悔」となりました。くやむこと。人に罪のゆるしを請うこと。自分の犯した罪を仏の前に告白すること。悔い改めることを意味します。

原始仏教では、半月ごとに布薩という儀式を行い、戒律の箇条が読み上げられ、罪があるときには自分で申し出て、告白して裁きを受けました。これが懺悔で、この時の作法を懺悔五法といいます。

『御文章』には「つみは十悪五逆謗法闡提のともがらなれども、廻心懺悔して、ふかく、かかるあさましき機をすくひまします弥陀如来の本願なりと信知して」とあります。自力をひるがえして、他力に帰する意味だと教えられました。

（辻本敬順氏「仏教用語豆辞典」参照）

住職レター

温暖化と云われるも、なんだか最近寒い日が多いように思います。小学生の時、半袖半ズボンで通した私としては、年齢を重ねて寒さに弱くなったのでしょうか。

さて、『足る（たる）を知る』と云う言葉、ご存知ですよ。『小欲知足』という、お釈迦様の有名なお説法です。欲を少なくして、足るを知ること。必要以上に欲張らず、現状を素直に受け入れることが大事という意味。

法事の時、ご法話で『小欲知足』を説いておりますが、私自身、なかなか出来ません。ついつい、あれも欲しい、これも欲しいと欲望ばかり。反省する毎日です。

実は昨年末、ようやくスマートホンに買い替えました。それまでは、古いタイプのケータイ電話を使いながら、家の者に、スマートホンを買って欲しいとお願いするも、却下され続けておりました。

スマートホンだと道に迷っても地図が出る…、それに対して家の者は、道に迷うような所へ行く必要は無いと。

法事を依頼されても、スマートホンのスケジュールを開いて、その場で法事の約束が出来る…、それに対して家の者は、寺の予定表とダブルブッキングしては大問題だと。そして最後には、足るを知りましよう云われて終わり。

いろいろ云われ続けましたが、ようやくこの度、足るを知りつつ、スマホに買い替えた云う訳です。

今の私がいつも身に付けている三種の神器ならぬ、（新）三種の仏器は、輪袈裟・念珠・スマホです。



（新）三種の仏器

